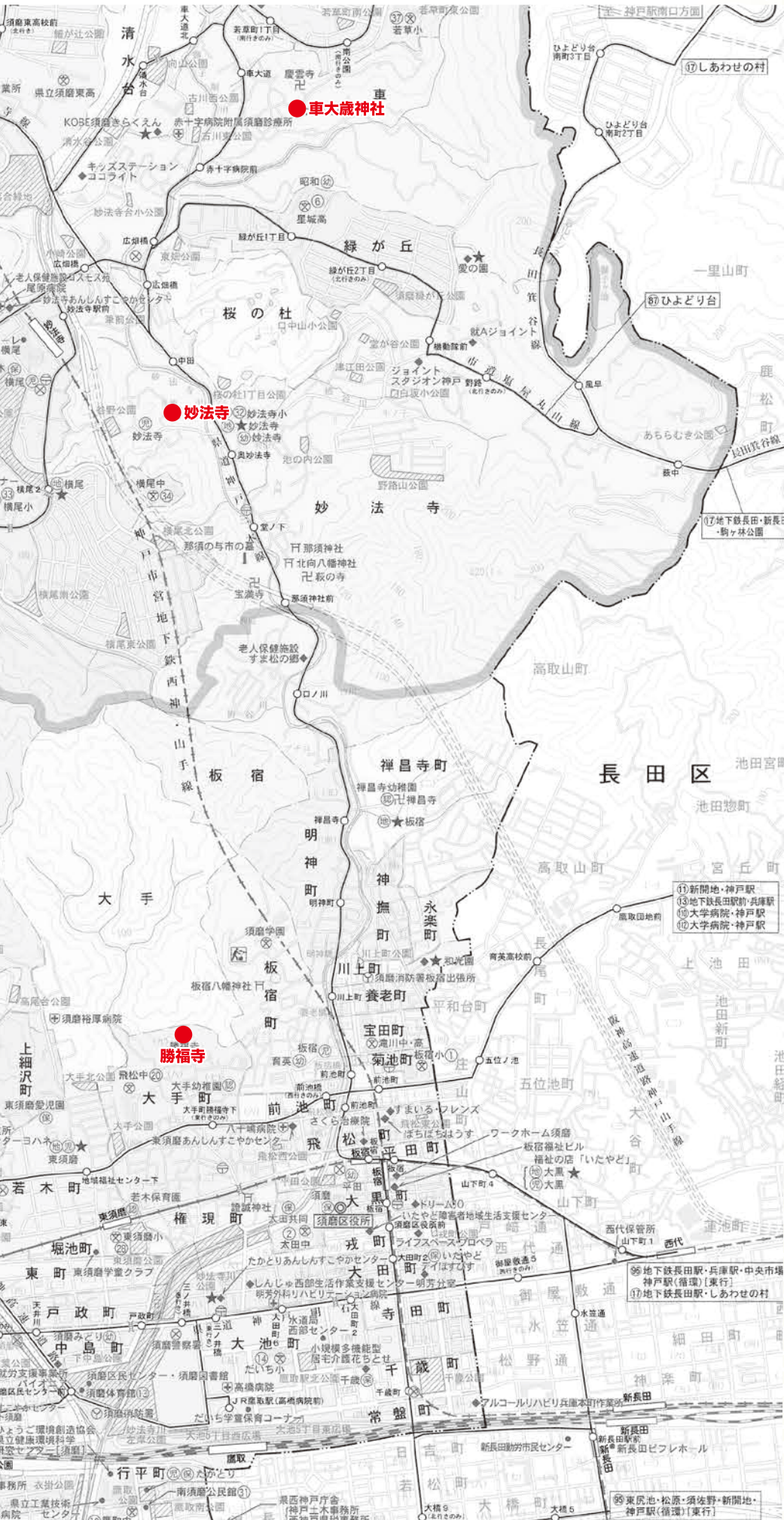


須磨の伝統行事・民俗芸能 開催場所

須磨区には古くからの伝統として各地域で今に受け継がれてきている民俗芸能が数多くあります。その中で無形文化財として国や県、市に指定・登録されている民俗芸能が5つあり、本地図にはこの民俗芸能が開催・実施されているお寺や神社の場所を記しています。





車大歳神社



妙法寺



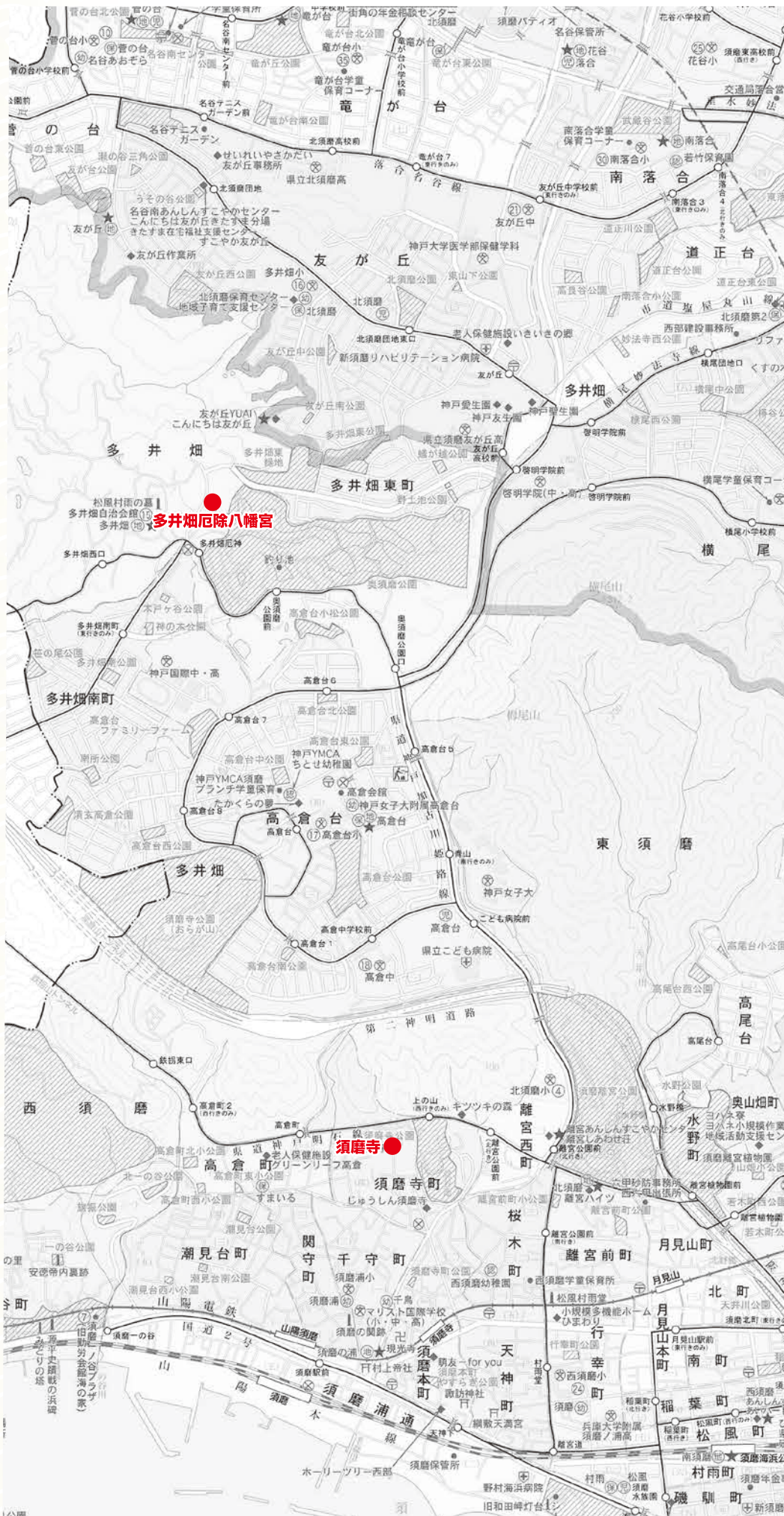
勝福寺



須磨寺



多井畑厄除八幡宮





社大神大車
舞翁



翁舞のかつての姿を

現在に伝える

646年(大化2年)の創立とさ

れる車大歳神社。その本殿で毎年1月14日に翁舞が行われる。地元では「お面式」「能面の式」「お面の行事」、あるいは「お面」と呼ばれる神事で、御神体である翁、三番叟、父の尉の三体の面を演者が着けて舞い、前年の実りに感謝し、その年の豊作を祈る。御神体とは神が宿る神聖なもので、三体の面は普段は神社に安置されているが、年に一度、この日に人々の前に姿を現して舞を繰り広げる。

守っており、芸能の変遷を示すのに重要とのことで、平成12年12月、神戸市で初めて国の重要無形民俗文化財に指定された。

古の形態を

守るための入念な準備

正月に行われる翁舞に向けて、準備は前年の11月から翁舞保存会によって進められる。まず、その年の頭宿を決める。頭宿とは、祭礼の運営基地となる家のことで、かつては地区の家の戸主が、隠居するまでに一度はつとめなければならぬとされていた。さらに、翁と父の尉(同じ演者)、露払い、三番叟、歌を唄う地謡、笛や太鼓の囃子方、それぞれの役を決める。翁および父の尉は、厄年(42歳)を迎える長男とされていたが、勤め人であれば会社で重要な役に就く年代のため参加が困難な場合が多く、現在は年齢に制限はなくなつた。露払いは10歳くらい、三番叟は12歳くらいの少年、囃子方は青年が担当する。

車大歳神社
クルマオオトシジンジャ

〒654-0111
神戸市須磨区
車字松ヶ原 551

翁舞の稽古は年明け8日から始まる。12日までの5日間、毎日頭宿で舞い、14日の本番までに完成させていくのだ。このときの三体の面は本物ではなく、複製品が使われる。これは、国の重要無形民俗文化財への指定を受ける際に東京で翁舞を演じることになり、御神体を持ち出すわけにはいかないことから作成されたものだ。

御神体の面を着け、

神として舞う

そして14日、いよいよ祭礼の日。午前中、翁舞保存会のメンバーがお祓いを受けた後、頭宿の主が、神社に安置されている三面の面を受け取って頭宿へ持ち帰り、面を確かめる「面検め」が行われる。そして午後6時頃、各役が装束を整えて頭宿に入り、本番さながらに御神体の面を着けて最後の「試し舞」を行う。その後、7時に行列を成して神主、面を持った頭宿、露払い、翁・父の尉役、三番叟、地謡、囃子方の順番に神社に

入り、舞殿で翁舞が始まる。その中で、「天下泰平」「国土安穩」「五穀豊穰」が祈願される。

日本の、そして地域の大切な文化を未来へ

歴史的に極めて珍しい形態を残す車の翁舞。過去には、第二次大戦の戦禍により2度ほど中断し、1970年に復活を遂げた。また、2018年の土砂崩れと2019年に巻き起こったコロナ禍では中止を余儀なくされた。そんな数々の不運、社会構造の変化や少子化といった問題に直面しながらも、保存会をはじめとする関係者の努力により、車の翁舞は未来へと確かに受け継がれようとしている。

出典

文化庁国指定文化財等データベース
<https://kunishiei.bunka.go.jp/heritage/detail/312/434>



妙法寺
追儺式



火の粉とともに

鬼が舞う勇壮な行事

毎年1月3日、ここ妙法寺では年頭行事「鬼踊り(追儼式)」が行われる。五穀豊穰、除災招福、無病息災を祈願するもので、鬼の一家がお伊勢参りの旅に出る様子を表しているといえられる。踊りには合計10人の鬼が登場するが、節分の「鬼は外」と追い払われるような悪鬼ではなく、毘沙門天に仕え仏法を守護する鬼神、つまり、災厄を祓ってくれるいい鬼なのだ。

当日は午後3時頃から本堂に和太鼓やほら貝の音が鳴り響く中、最初にジカ鬼といわれる黒鬼5人が回廊に上がり、松明を持ってぼんぼんと跳びながら進む。次いで子鬼2人が先導する松明の火を杖で打ちながら跳ねる。その後、いよいよ白鬼3人が登場。主役の太郎鬼が松明と斧を打ち付けて火を切り、赤々とした火の粉を舞い散らせながら勇壮な踊りを繰り広げ、次郎鬼、パパ鬼がこれに続いて進む。この一

連の踊りを、子鬼が出ない回や所作の異なるパターンを交えて4回繰り返し、5回目にクライマックスの餅割りが行われる。

遂に餅を割り、

幸せを分け与える

太郎鬼が、正面に置かれた大きな餅に勢いよく槌を振り下ろすのだが、なかなか割れない。そこで槌を斧に持ち替えると、今度は無事成功。さらに、この餅を子鬼の頭に載せようとすると、支え切れずに子鬼は転んでしまう。餅は幸福を象徴しており、この大きな餅には大きな幸せへの願いがずっしりと込められているのだ。そして、最後に鬼が勢ぞろいし、参拝客に向けて餅撒きが行われ、人々に幸せが分け与えられる。

所作にはすべて意味があるとされるが、多くは定かではなく、言い伝えとして残る。例えば、松明の火を斧でたいたいて落とすのは火の始末への戒めなのだろうか。また、鬼

が登場とともに足で地面を踏みしめるのは、大地の邪悪な霊を踏み鎮めるための陰陽道の歩行呪術、反問に由来しているとされる。

面や衣装、火にこだわり、

伝統を貫く

妙法寺の「追儼式」の発祥は平安時代とされ、様式や所作は口伝によつて連綿と受け継がれてきた。鬼の面も代々寺に伝わるもので、鼻のところから差し入れた紐を噛んで固定するというもの。衣装は麻、その上に巻き付ける蔓の素材も葛と決まっている。また、松明は安全な模造品が使われることが多いが、妙法寺では竹を束ねた本物を使う。そのため、火の粉が舞う様子は壮観だが、鬼役は火傷をしないよう注意しなくてはならない。以前、本堂が木造だった頃は、踊は水を撒きながら行われ、床板の間から火の粉が落ちるため、式の後には夜通し火の番をするなど、防火対策は大変だったようだ。

地域の遺伝子として

伝えていく

この行事を次代に伝えていくため、昭和51年に妙法寺追儼式保存会が組織された。さらに、昨今は伝統を守り続けるために柔軟性も必要になってきている。本来、鬼役は村の中から選ぶことになっていたが、少子化や核家族化で成り手が少なくなつたため、子鬼については地域を超えた人選も行うようになった。また、面や衣装などの修理ができる人材も地域にいないなど、全国を対象に広く求めようとしている。

ただ、踊りについては、親から子へ自然に伝わっていることが多く、練習しなくても踊れる人は珍しくない。ほら貝や太鼓、衣装の着付けなどもしっかりと受け継がれており、世代交代がうまく進んでいるといえる。そして、子鬼の役を果たした後、「大人になったら必ず鬼をやる」と目を輝かせる子どもたち。彼らがこの行事の未来を担っている。

妙法寺
ミウホウジ

〒654-0121
神戸市須磨区
妙法寺毘沙門山 1286



勝福寺

送儺式



千年前の鬼退治に由来

勝福寺の追儼式は、寺の創建につながる伝説に由来している。今から千年以上も昔、平安時代中期のこと。高取山の北、現在の町名にも残る鹿松峠に鬼人が出ては旅人を襲っていた。それを案じた一条天皇は高野山の若い僧、藤原英雄丸に仏教の力で鬼人を退散させるよう命じた。英雄丸は証樂上人と名を改め、峠近くに庵を建てて祈り続け、鬼人退治を成し遂げたという。そしてその後、988年(永延2年)に勝福寺を開いたとされる。毎年1月7日に行われる追儼式は、このときの鬼人退治の踊りと伝えられている。

鬼は5人、その中に天狗がいる

当日、日が暮れると僧侶の読経とともに、高野山奥の院で千年以上灯し続けられている「不滅の聖燈」の分火を種火に、とんど(竹などを組んで燃やし、正月飾りやお守りをくべて災いを祓い、福を呼ぶ)に火が付けられる。そこに赤鬼と白鬼が現れて門松をくべると、鬼踊りが始まる。ほら貝と太鼓の音に合わせて鬼たちが邪気を祓う歩行法、反閉を踏みながら登場。黒鬼、青鬼、白鬼(ババ鬼)、赤鬼、そして天狗を加えた5人と子鬼4人が、メンバーや所作などを違えながら計5回踊る。4回目に全員が登場して餅割りを行うのだが、餅割り役の赤鬼が槌で割ろうとして失敗し、5回目に斧に持ち替えてようやく割れる。

この餅割りには、人々に福を分け与えるという意味がある。餅はとんどの火であぶって持ち帰ると一年間風邪をひかないとされ、かつては参拝客に配っていたが、現在は衛生面などから菓子などの供物に代わった。

独自の伝統と

スタイルを継承

夜行われる追儼式は近年では珍しい。ここでは、火が重要な意味を持つ行事として伝統が守り継がれているのだ。また、鬼に天狗が加わっているのも勝福寺ならではの。槍で他の鬼をつつくなどコミカルな役回りを務め、他にはないユニークな鬼踊りが展開される。

鬼が持つ松明もとても大切で、勝福寺では麦わらで作ることにこだわっている。というのも、この松明、特に赤鬼のものには魔除けの力があると信じられ、行事が終わるとばらして人々に配られ、玄関などに厄除けとして置かれるため、他のものではなかなか代用できないのだ。ところが昨今は麦わらが手に入りにくくなった。麦を育てる農家の減少や、機械化で麦わらが粉碎されてしまうからだ。勝福寺では昔は地元の麦わらを用いていたが次第にそれが難しくなり、現在は淡河近辺の農家までもらいに行っている。麦わ

らは6月頃に集められ、天日に干して乾かすなどの期間を経て11月から松明作りが始まり、行事の準備が本格化する。

伝統を確かに

つないでいくために

少子化や核家族化による鬼の成り手不足も悩ましい。鬼は踊りの回ごとに面を付け替えて交代するため人数が足りず、ここ数年は1人少ない4人で踊る年が続いた。これまでも、古くは昭和13年の阪神大水害による本堂倒壊(平成21年に再建)、第二次大戦、新型コロナウイルス禍など、逆境は幾度もあったが、追儼式の伝統はしっかりと受け継がれている。

現在、保存会を中心に行事の継承に努めており、鬼は檀家の長男、子鬼は小学校中高学年、行事を支える裏方は地域の人、といった従来の枠にこだわらず、門戸を広げようという考えが出てきている。

勝福寺
ショウフクジ

〒654-0013
神戸市須磨区
大手町9丁目1-1



須磨寺
須磨琴



在原行平の

叙情から生まれた

須磨ゆかりの伝統楽器、須磨琴。一絃琴とも呼ばれるとおり、一本の弦が一枚の木製の胴体に張られた古来の弦楽器だ。爪として筒状の蘆管を両手にはめ、左手で弦の音程を決める勘所を押さえ、右手ではじめて音を出す。決して大きな音は出ないけれど、実に繊細で趣深い音色を響かせる。須磨寺には、江戸時代、河内国の高僧、覚峰律師が自ら作成し奉納した、日本最古の須磨琴が保存されている。

言い伝えによれば、平安時代初期、都を追われて須磨に流された中納言、在原行平が渚で拾った舟板に冠の糸を張り、岸辺に生えていた葦を切って爪(蘆管)にして弾き、都を思いながら自らの寂しさを慰めたのが始まりとされている。これを覚峰律師が江戸の世に広め、幕末から明治前半にかけて、名人真鍋豊平が奏法や作曲などに多大な功績を残し、愛好者を増やした。ところが、その後は西洋音

楽に押されて衰退の一途をたどっていった。

歴史的遺物から

音楽としての復興へ

戦後、絶滅してしまいそうになっていった須磨琴だが、あるきっかけから復興を遂げることになった。昭和33年、国の指定無形文化財の土佐一絃琴奏者、秋沢久寿栄氏の演奏会が須磨寺で開催されたときのこと。当時の管長、小池義人和尚がその「生きた」一絃琴の音色に魅せられ、須磨琴の伝統を復活させようと思いついた。そして、研究家の力を借りて進めることに。

昭和40年には保存会を設立したが、初期の須磨琴の音があまりに情けなく又、練習に必要な琴の確保が困難であるという多難な船出だった。楽器の制作には、寺宝の須磨琴を元に試行錯誤を繰り返した。板には桐を用い、響きをよくするために胴をくり抜くなどの工夫を加え、蘆管を象牙(後にプラ

スチック)で作り、弦には絹糸(後にナイロン弦)を張った。苦難を乗り越え少しずつ復興への道のりを歩んでいく。

現代に鼓動し始めた

須磨琴

そして、時代の追い風というべきか、須磨琴が全国に知られる機会が訪れた。珍しい楽器の復活がマスコミの目に留まり、テレビにも度々取り上げられたのだ。おかげで演奏の依頼も増え、習いたいという人も多く集まってきた。さらに、昭和47年のNHK大河ドラマで須磨が脚光を浴びたことで人気に拍車がかかった。

須磨琴を音楽として存続させるには、現代のスタイルに合わせることも必要だ。部屋で和歌を歌いながら一人で弾くものから、広い空間で聴衆を前に演奏する形態へ。それには音が小さいため、多人数での合奏を取り入れた。そして、より豊かな表現のためにハーモニイを加え、低音が出る須磨琴も新たに

大本山須磨寺
ダイホンザンスマデラ
一絃須磨琴保存会

〒654-0071
神戸市須磨区
須磨寺町4丁目6-8

この響きを未来に

つないでいくために

製作。他の和・洋楽器との合奏も行うようになった。

現在、須磨琴保存会の会員は二〇〇人ほど。年一〇〇回以上の演奏会を開くとともに、京阪神では地域の文化センターや公民館などで稽古を行っており、東京にも教室を開いている。また、地元の小中学校の要望にこたえ、子どもたちへの演奏指導に当たっている。

これからの存続、発展のためには、愛好者の裾野を広げることが不可欠だ。社会人も気軽に習えるよう、夜間の教室やインターネットを使った稽古など、さまざまな取り組みを模索中だ。同時に、須磨琴の魅力を伝えるため、動画サイトやSNSなどの新たなメディアの活用も進めている。

平安の頃から細々と、しかし確かに人々に愛されてきた須磨琴。その「二本の絃」はいま、未来にしっかりとつながろうとしている。



多井畑
乃冬文文斗



子どもたちがカネを鳴らし、

うたいながら練り歩く

旧暦8月13日(9月の中頃)の夜、30人からなる子どもたちの行列が行燈を先頭に村じゅうを練り歩く。緋の着物に身を包み、白い足袋をはき、白い手ぬぐいのほおかぶり、もしくは頭にはちまきを巻き、左手にカネをつるし、右手にはカネをたたく撞木。そんないでたちで、太鼓に合わせてカネを鳴らしながら古くから伝わる歌をうたい、最後に宮入りして行燈を奉納する。これが多井畑厄除八幡宮の「カネタタキ」と呼ばれる「みあかし奉獻神事」で、その年の豊作を願って行われる。

みあかしとは、神仏に供える灯火のこと。ここでは長さ4メートルほどの棒の上部に、紙を貼り合わせた箱状の行燈に灯されており、その4面にはそれぞれ「今日今日」「若中」「御神燈」「五穀成就」の文字が書かれている。この行燈を行列の先頭で3人ほどが支えて掲げ、太鼓の拍子に合わせて地面を突きながら移動していく。

六斎念仏の原型と

される歴史ある神事

この行事の発祥は定かではないが、江戸末期には行われていたという記録が残っている。ただ、平安時代中期に空也が始め、鎌倉時代に一遍上人が広めた念仏踊りの一種である六斎念仏の原型ともいわれ、その成り立ちは古い。六斎とは、仏教で不吉の日とされる六斎日のこと。この日にカネや太鼓をたたいて念仏を詠唱するというのが六斎念仏だ。

この夜、行列を成すのは小学校2年生から中学2年生の男子。平成が始まる頃までは、踊りや歌や所作はすべて年長の子どもが教える子どもたちだけの祭りだったが、現在は少子化の波を受けて保存会の大人が指導に当たるようになった。また、参加する子どもたちも氏子に限らず、地域に対象を広げている。

入念に行われる練習と準備

子どもたちの練習は開催一週間前から神社内で行われる。行列で

多井畑厄除八幡宮
タイノハタヤクヨケ
ハチマンガウ

〒654-0133
神戸市須磨区
多井畑 字宮脇1番地

の分担は高学年から、行燈、太鼓、うたい出し、提灯、カネ。覚えることが多く、特に初めて参加する子どもにはなかなか大変だ。カネのたたき方や足の運びは比較的単純だが、難しいのは歌。全部で2、30曲もある歌は昔の言葉でつづられており、行燈が進む場所によって決まった歌がうたわれる。

衣装については、代々受け継がれてきたものを使い、練習の2、3日前に全員の寸法合わせを行って、体形に合わせて手直しをしておく。行燈やカネなどの道具類も神社に保存されているもので、必要に応じて事前に補修される。

時代とともに

変化しながら継承へ

そして当日、午後6時すぎに子どもたちが当屋に集まり会食をした後、午後7時頃に出発となる。当屋とは、祭礼や神事などの行事で中心的な役割を果たす家のこと。昔は8人の神職が順番に担当していたが、現在は受け入れ可能な氏子が年ごとに持ち回りをして

いる。子どもたちにふるまう食事も、以前は当屋が作る煮しめにご飯だったが、近年は仕出しの幕の内弁当が出されるようになった。行列はまず、当屋の庭に行燈を立ててカネをたたきながら「こちらの館はめでたい館」と言いながら庭をまわり、その後、行燈を先頭に村へと進んでいく。そして午後8時すぎに宮入り、灯火奉納となる。

この日、地元の人たちが畑で収穫した野菜や果物を奉納するのが昔からの習わしで、農家が少なくなった今、作物を購入して納めるのも通例となっている。

氏子に限らず、地域の子どもたちが参加できるようになり、新たに移り住んだ人が伝統行事に関われると喜ぶ声も多い。また、いずれは女子にも門戸を広げようという案も出ており、多井畑のカネタタキは時代に寄り添いながら、変わらない響きを伝え続けようとしている。

神戸歴史遺産

少子高齢化や地域社会の変化等により、これまで地域が支えてきた伝統行事や、地域の拠り所となってきた建造物の継続や維持が危ぶまれています。法や条例によって文化財指定等を受けたものに対しては修理等の補助制度はありますが、所有者等にとっては自己負担も大きい状況です。さらに未指定のものには助成は少なく、これらを支えてきた関係者の減少により、さらに経済的負担が増加しています。このような状況に対して神戸歴史遺産制度は、これらの歴史遺産を広く知ってもらおう事により継承意識の向上を図るとともに、ふるさと納税等の寄附をもとにした新たな経済的支援制度により、多くの人と一緒になって貴重な歴史遺産の継承を支えていくための仕組みです。令和3年度に認定された須磨区内にある神戸歴史遺産を紹介します。

「武井家文書」 および 「武井家伝来絵画資料（粉本）」

所在地：神戸市須磨区板宿町2丁目2-11（百耕資料館）
所有者：一般財団法人 武井報効会代表理事 武井宏之

概要

現在の須磨区板宿町の旧家武井家に伝来した資料群であり、現在は昭和62年（1987）に同家が設立し、翌年に開館された百耕資料館で所蔵され、一般財団法人武井報効会が管理運営している。なお、武井家は、江戸時代までは武貞姓を名乗っており、江戸時代には庄屋・惣代庄屋、明治時代以降には須磨町長など、地域行政の代表者を輩出した家柄である。

「武井家文書」は、近世から近代にかけての古文書群であり、主に18世紀半ば以降の板宿村と近隣の村々の土地・年貢・戸口・支配・村政・宗教・訴訟などに関する文書近世）と明治時代から戦前までの行政史料及び名望家であった武井家の生業や文化活動などに係わる文書（近代）で構成されている。「武井家伝来絵画資料（粉本）」は、明治時代から大正時代の当主・武井伊右衛門が収集し、以後同家に伝わった、絵師（画家）の本画作成のための画稿・下絵、古画の模写、写生帖といった絵画資料群である。その大半は、伊右衛門が師事していた近郷在住の絵師である岡田廣章の旧蔵品であり、彼が作画の過程で作成・収集したものと考えられ、地方絵師がどのように絵画を学び、作成したかを伝える資料である。

これらの資料群は、百耕資料館において保存・調査・研究が行われ、その成果は、同館の常設展示・企画展示等を通じて発信されている。



野田村・駒ヶ林村水論につき言上書（寛永19年）



木権狗子図（原作者：円山応挙）

百耕資料館所蔵

安徳帝内裏跡伝説地

所在地：神戸市須磨区一ノ谷町2丁目74-12（約250m）
管理者：一ノ谷史跡保存会代表内田啓子

概要

源平合戦にまつわる名所として一ノ谷に安徳帝内裏があったとの伝説が生まれ、現在に伝わっている。

安徳帝内裏跡伝説地が確認できる最も古い文献は、寛文7年（1667）に作成された『撰津名所地図』で、一ノ谷と二ノ谷の間に安徳帝内裏跡との記載があり、その位置が現在の一ノ谷町2丁目付近であったと推定できる。その後、名所記や錦絵などの資料に内裏跡が描かれ、一ノ谷に安徳帝内裏跡が存在したという伝説が江戸時代には一般的に認識されていたようである。それを示すように須磨を訪れた松尾芭蕉も紀行文『笈の小文』の中で内裏跡を見たこと記している。

明治時代以降、伝説地周辺は次第に宅地化し、現在伝説地は公園となっている。敷地内には、安徳宮、眞理胡辨財天、稻荷社、灯籠、「安徳帝内裡跡傳説地」の石碑、玉垣の一部が存在している。灯籠は、モルガン灯籠と呼ばれており、近隣に住んでいたアメリカの大富豪モルガン氏の妻ユキが明治44年に寄進したものである。また、石碑は紀年銘から大正10年に建立されたものとわかる。敷地内のこれらの建造物からは、地域の歴史や地域住民による伝説地の保全の歩みが窺える。また、ウォークラリーのチェックポイントや、近隣の小学校の生徒たちの地域学習の場としても利用されている。



安徳宮



安徳宮の社



一ノ谷展望台近くから望む安徳帝内裏跡

【参考文献】

神戸の民俗芸能 長田・須磨編

【編集・発行】

須磨区まちづくり課

令和4年3月吉日

神戸市広報印刷物登録 令和3年度第325号(広報印刷物企画 A-1類)

【おことわり】

記事の内容・年代・日付・場所などにつきましては、誤り・漏れのないようできるだけ確認しましたが、万一誤り・漏れなどがございましたらご容赦ください。

